

日本占領期のビルマにおける米不足再考 — 戦争末期のシャン連合州を中心に —

武島 良成

Reconsidering the Rice Shortage in Burma During the Japanese Occupation
— Focus on the Shan States at War End —

Yoshinari TAKESHIMA

Accepted December 2, 2009

抄録 : 本稿は、日本占領の末期のビルマ・シャン連合州における米不足の様相を掘り下げるものである。第 1 章では、新たに入手したイギリス側の史料を使い、不足と徴発の状況を検討する。第 2 章では、主に日本の将兵の回想記を使い、敗走の中での米の徴発の実相を見る。退却路となった南シヤンのカレンニ行政区には、人口が 6 ～ 7 万人しかいなかった。そこを、2 万人の日本兵と患者が通り抜け、さらに 1 万人が終戦まで居座って徴発を続けたのだった。そのことで住民が受けた打撃は、かなり深刻なものだったと考えられる。

索引語 : 太平洋戦争, ビルマ, シャン州, 日本占領期, 米不足

Abstract : In this paper, I examined various aspects of the rice shortage in the United Shan States of Burma while under Japanese occupation. In the first section-using newly obtained documents from the United Kingdom-the circumstances of the shortage and commandeering are examined. In the second section, the actual circumstances of the rice commandeering during the Japanese retreat are analyzed based on the memory of Japanese military officers and soldiers.

There were only sixty or seventy thousand people in the Karenni district of South Shan, through which the Japanese army retreated. Twenty thousand Japanese soldiers and invalids were taking flight and ten thousand of them lingered there, under continued commandeering, until the end of the Pacific War. It is not unimaginable that residents suffered heavily under the Japanese requisitioning.

Key Words : Pacific War, Burma, United Shan States, Japanese Occupation, Rice Shortage

はじめに—日本軍のビルマ占領と米不足をめぐって

筆者は、1999 年の論稿「日本占領期の中部ビルマとシャン州の米不足」で、中部ビルマとシャン連合州で、1942 ～ 1945 年に米不足が起こっていたことを指摘した（武島, 1999）。その論拠は、まず、

日本軍側が必要量の搬入に失敗したとしている地域と、ビルマ側の編纂物『アシェイアーシャタイツ・ルーゲーミャー・アスィーアヨウン・タマイン・1942～1945』に記された不足地が、細部まで一致していることだった。戦前の米の生産量の統計 (*Season & Crop Report*) を、県ごとの需要の見積もりと照らし合わせても、中部ビルマのミンジャン県、パコックー県、メイッティーラ県、並びにシャン連合州が、元来搬入が必要な地域だったことになる。これらのことを総合して、戦争による混乱により輸送が困難になり、不足が顕在化したと考えた。

その後 2007 年の論稿で、高橋昭雄氏が *Season & Crop Report* の 1943/1944 年度分 (1943 年産米の統計) を紹介し、ビルマ「本土」の地域ごとの過不足の状況につき、研究を深化させた (Takahashi, 2007)。この 1943 年産米は、1943 年 12 月～1944 年 2 月頃に収穫され、その後の 1 年間の需要を賄うものだった。この時に、供給が米換算で 2 万 5000 トン以上不足すると見積もられた県は、中部ビルマのタイエツ (2 万 8000 トン以下不足量)、マグエ (4 万 2000 トン)、ヤメーティン (4 万 3000 トン)、北ビルマのザガイン (2 万 9000 トン)、カータ (2 万 6000 トン)、上チンドウィン (2 万 5000 トン) などだった。氏はさらに、1945/1946 年度分 (1945 年産米の統計) を紹介し、戦後の復旧の様子についても、一定の示唆を与えている (Takahashi, 2007 年, p.167)。

ただし、1944 年産米 (1944 年 12 月～1945 年 2 月に収穫) の統計がない (おそらく作成されていない) ため、2 度目の戦線の通過があった 1945 年について、特別な言及はない。この年の産米こそが、戦争の影響を最も被り、食料事情を最も悪化させたと考えられる以上、その様相が深められていないのは残念なことである¹。また、1943/1944 年度分の統計では、マンダレーが不足地になっているが、筆者が集めた史料の中には、同地での不足を具体的に物語るものはない。同地は交通の結節点であり、周辺からかなりの米が流入していたのではないかと考えられる。また、住民の疎開により、需給のバランスが、統計のものとかかなり変わっていた可能性もある。実態に迫るには、統計の数字をそのまま信用するのではなく、関連する史料を発掘して照合する作業が必要となるだろう。

また、筆者は、統計とイギリス政庁の見積もりを根拠に、下ビルマから上ビルマに、平時でも 20 万トンを搬入する必要があったと考えた (武島, 1999 年, p.17)。高橋氏は、日本占領期の米不足の主因を、上ビルマ自体の減産に求めているが (Takahashi, 1999 年, p.168)、20 万トンというのは 120 万人の 1 年分の消費量になる²。それが停止状態に陥った意味は、過小評価できるものではない。また、燃料や車両の不足で流通が滞っていた以上、上ビルマ内の輸送・配分の成否も問題にされなければならない。現時点では史料不足のために難しいが、上ビルマからシャン連合州への搬出の詳細を含め、流通の実態を明らかにする必要があることを確認しておきたい。

これらの他、日本軍による米の徴発の問題についても、なお掘り下げて考察する必要がある。これは、特にジャワやベトナムで注目されてきた論点である³。ただし、計算上、例えば 1 万人の将兵の 3 ヶ月分の米を集めたとしても、400～500 トンにしかない。12 ヶ月分でも 1600～2000 トンである。ジャワやベトナムは、300～400 万トンの米を産出しており、供出後に民需に戻された部分も多かった。数字の桁を見比べる限り、徴発による打撃を過大視するべきではないだろう。ベトナムの飢餓について分析した古田元夫氏も、米 (粳) の徴発による打撃の度合いは、流通の実態を明らかにしながら慎重に見極める必要があると述べている⁴。

一方で、筆者は、1944 年のインパール作戦の間の、カボウ谷地の状況を分析したことがある (武島, 2004 年)。同地は、もともと人口が少なく、米の生産量が限られた地域だった。そこに、補給が途絶し飢餓状態になった 10 万人近くの日本兵がなだれ込み、食料の徴発を繰り返したのだった。この時、日

本兵は数万人が餓死し、カボウ谷地は「白骨街道」と呼ばれるようになったが、住民が被った打撃も大きかったと考えられる。これと同じような、人口希薄地域での集中的な徴発が、末期のビルマでは各地で起こっていたのではなかろうか。

それは例えば、第2の「白骨街道」と呼ばれた、南シャンの中央部からカレンニ行政区に至る一帯である。この地区は、1945年4～7月に、日本軍の北ビルマからの敗走路となった。イギリス軍が早期に平野部を押さえたために、第15軍の将兵や多くの入院患者が、南シャンからカレンニの山岳路を通して脱出したのだった。筆者は既に、南シャンのアウンバン、シュエニャウンなどが、1943年頃から米の不足地として名があがっていることを指摘した（武島，1999年，pp.18-20）。そこを、1945年に、補給が途絶えた数万人の日本兵と患者が通り抜けたのだから、住民が受けた打撃は一層拡大したと考えられる。特にカレンニ行政区が、かなり深刻な状況になっていた可能性がある。

日本占領期ビルマの米不足をめぐる研究は、以上のような状況にある。本稿では、前段の、流通に関する分析については他日を期すことにし、後段の、シャン連合州の戦争末期の状況を掘り下げることとする。史料については、「日本占領期の中部ビルマとシャン州の米不足」の脱稿後に入手したイギリス旧インド省図書館、イギリス国立公文書館に収められた報告類を活用する。また、大量に残っている元日本兵の回想記を活用し、同時代史料の不足を補おうと思う。ビルマ国立公文書館での調査で有用な史料が見つからず、住民レベルでの史料が欠落するという限界があるが、新たな史料発掘に繋がる視点を提供するためにも、意味のある作業になるだろう。

その際、第1章では、シャン連合州の戦争末期の米穀事情を、イギリス側の史料を中心に深める。先行研究では、戦争末期の状況まではあまり掘り下げられていなかったが、イギリスがどのように捉えていたのかを見ることにする。その上で、第2章では、主に日本側の回想記を使い、敗走の中での食料徴発の様相を見ていく。そして、「まとめと展望」で総括をする。

第1章 イギリスの史料から見たシャン連合州の米穀事情

シャン連合州の米穀事情について、筆者は既に、戦争中盤以後に深刻になったことを伝える各種の史料があることを示した。北シャンの人口が69万人だったのなら、年間の米の需要は11万5000トンと計算できる。生産が5万トン程度だったとすれば、大量に（5～6万トン？）運び込む必要があったことになる。1943年の段階で、ラーショーを経由する鉄道により、毎月3000トンの搬入が必要だったという史料もあり、これに従えば年間3万6000トンということになる。日本軍の内部史料によると、一定量の輸送が行われたのは占領の初期だけだったようなので、間もなく深刻な状況になったと推測できるとした。また、南シャンについても、少なくともアウンバンやシュエニャウン周辺で不足していたことが、日緬双方の史料から読み取れると指摘した（武島，1999年，pp.17-20）。

その後入手したイギリス側の史料でも、シャン連合州の食糧不足はかなり深刻に捉えられている。例えば、1945年5月のイギリス軍の調査資料（IOR M/5/85）は、日本占領期のシャン連合州では、労働力を他の方面に動員されたために米作が低下したとまとめている。ビルマ「本土」からの移入も減り、人々は、根菜やジャガイモやatta（小麦粉を焼いて固めたもの）を食べた。ビルマへの小麦の輸出は禁止されたが、腹をこわして死ぬ者もいたということである。

この調査資料では、多数の日本軍が駐屯した北シャンの方が、南シャンよりも不足が深刻だったと

されている。占領初期にはある程度軍用米が移入され、住民にもまわされたが、1944年には移入が激減したということである。また、別の史料には、北シヤンの南センウィ州の状況が具体的に記されている。1943年7～8月に、米の収穫が例年の半分になった、水牛と豚が疫病で大変不足している。役人が米の30パーセントを税として集め、大変な抑圧があったと見られるということである（WO 220-142）。



ビルマ関係地図

この WO 220-142 によると、1944 年初めから、バ・モオ政府の増産策がシャンにも広がったのだという。実際、ビルマ「本土」では、この時期に増産が本格的に政策化されたし、シャン連合州についても、東亜青年連盟が農作業に協力していたことが知られる。このような増産の動きは実際にあったのだろう（武島，1999 年，p.19）。しかし、その収穫期（1944 年 12 月～1945 年 2 月頃）の情報として、イギリス軍は以下のようにまとめている。まず北シャンでは、タウンペン州で 200 ポンドの米が約 5000 ルピーになった（1945 年 5 月の報告，IOR M/5/85）。タウンペンの東方のナンマツーでは、米 1 ヴィサ（1623 グラム）の価格が、1943 年には 3～5 ルピーだったのが、1944 年 6 月には 30 ルピー、1945 年 1 月には 50 ルピーになった、ということである（IOR M/4/2540）。

イギリスの情報史料では、マンダレーでは米 1 バスケット（75 ポンド）の価格が、戦前には 3.5 ルピー、1944 年 2 月に 20 ルピーだったとされている（WO208-163）。単位をこれらと同じ 1 バスケットに合わせると、先のタウンペンの米は 1875 ルピー、1945 年 1 月のナンマツーの米は 1050 ルピーということになる。1944 年 1 年間の軍票の価値の低下を考慮に入れても、非常に高騰していたことになる。このような米の高騰の他、イギリス軍は、日本軍が潤滑油に使ったこともあり、食用油も騰貴したとしている。1944 年 12 月には、4 ガロンがティーボー（タウンペンの南方）で 1500 ルピーに、センウィ（タウンペンの東北方）では 3000 ルピー、ラーショー（タウンペンの東方）では 2500 ルピーになったのだという（IOR M/5/85）。

さらに、イギリス軍は、北シャンを再占領した直後の 1945 年 4 月に、外部から搬入が必要な食料を、5 月に 950 ロングトン（965 トン）、6 月に 2150 ロングトン（2184 トン）、7 月以降に 2200 ロングトン（2235 トン）と見積もった（WO203-893）。7 月以降というのは、次の米の収穫までの 8、9、10、11 月にも、2200 ロングトンずつ必要だということのようである。先に見たように、日本軍も 1943 年に、ラーショー経由で毎月 3000 トンの移入が必要だとしていた。イギリス軍の見積もりは、後で見る南シャンの分を合わせると、5 月に 1750 ロングトン（1778 トン）、6 月に 3850 ロングトン（3912 トン）、7 月以後に 3900 ロングトン（3962 トン）ということになる。数字が日本軍のものを多少上回るのは、副食物を含めたからだろうか。ただし残念ながら、イギリス軍がこの必要量をどの程度搬入できたのか、手元の史料からは判然としない。

一方、南シャンに関しては、1945 年 5 月の調査資料に、以下のように細かく記されている（IOR M/5/85）。中央行政地区については、4 つの州について米に関する記述がある。以下、それらを並べていく。ヤウンウェ州（人口 11 万 3000 人⁵⁾）：普段から米が不足していただけでなく、日本軍が大量の野菜や魚を持っていった。ロックソック州（3 万人）：普段は米が余っており、1944 年度の米も需要を満たす筈だったが、日本軍が沢山持っていった。また、牛や荷車も徴発された。バンイン州（1 万人）：普段は米が余っていたが、日本軍がかなりの米を持っていった。サートウン州（1 万 2000 人）：普段は米が余っていたが、日本軍が多くを得た。

北東行政地区については、2 つの州に関し米に関する記述がある。ライカ（レーチャー）州（3 万 4000 人）：普段は米が余っていたが、現在は南シャンで最悪の状況である。メンキュン（マインカイ）州（3 万 7000 人）：普段は米が余っていたが、今は最悪である。西行政地区（ミェラッ地方）については、一括して、普段から米の不足地域で、ジャガイモを沢山つくっていると記されている。日本軍は、沢山の米とジャガイモ、さらに家畜を持っていったということである。

南東行政地区については、メンパン（マインパン）州（2 万 1000 人）について、米に関する記述がある。普段から米が不足していたことに加え、多くの米と家畜を日本軍に供出したというのである。カ

レンニ行政区（5万9000人）については、普段から米が不足していたことが記されている。ただ、現状については、情報不足で不明だという。

このような情報の他、イギリス軍は、1944年後半から1945年3月までに、南シャンでの家畜（おそらく食料用）の徴発割り当てが8000頭に達したとしている（IOR M/4/2540）。ビルマ全土への割り当て数については、「5万頭」「3万頭をくだらない」と、表現にばらつきがあるが、半分が徴発されたということである。

連合国軍の南シャンへの侵入は遅れ、1945年6月末にようやくカローやタウンジーを確保した。その後はほとんど進まず、カレンニ行政区には足を踏み入れないまま8月の終戦を迎えたのだった。イギリス軍は、4月段階で、南シャンに対し5月に800ロングトン（813トン）、6月に1700ロングトン（1727トン）、7月以後は毎月1700ロングトンの搬入が必要だと見積もっていた（WO203-893）。だが、これらはほとんど供給できなかったことになる。なお、同じ史料に、7月頃に南シャンで5000トンのジャガイモの余剰が出そうだという見込みが記されている。とはいえ、ジャガイモは重量に比べてカロリーが低く、熱量を米に換算すると1000トン相当にしかない。ジャガイモは救世主にはならなかっただろう。

以上のイギリス側の史料は、シャン連合州の米穀事情が、戦争後半に特に悪化したという見方を補強する材料になるだろう。その際、日本軍による徴発が、末期に過酷なものになったことも窺える。ただし、これらの史料は、1945年5月中旬までにまとめられたものである。日本軍は、同年4月中旬に、逐次南シャンからカレンニ行政区を通り撤退を始めていた。イギリス軍の調査資料では、カレンニ行政区の様相は情報不足で不明とされているが、退却する日本軍がまとまって餓死し、インパールに次ぐ「第二の白骨街道」と言われた地域は、同行政区を中心とした一帯である。食料の奪い合いも、カレンニ行政区において最も激しかったことが予想できる。次章では、日本の将兵の回想記に、これらの地区での食料の徴発がどのように記されているか見ていく。

第2章 南シャンとカレンニにおける撤退戦

第1節 撤退戦の概要

1945年4～7月に南シャンからカレンニ行政区を通り抜けたのは、第15軍などの将兵である。同軍の主力は、イギリス軍の戦車部隊が一気にメイッティーラを突破したために、後方に取り残された。そこで、隷下の第56師団が南シャンと北シャンの境界で防衛線を敷き、3月末から4月中旬に、第15師団、第31師団、第33師団の順で、西方から南シャンの高原に退避・退却した。この3つの師団は、既に大きな犠牲を出していたが、シャン州を南下して、ヤメーティン、もしくはタウングーに出て、同方面を守る第33軍に合流する予定だった⁶。

ところが、イギリス軍は、この第33軍を排除して一気に南下し、4月22日にタウングーを通過した。そのために、カレンニ行政区に入りつつあった第31・33師団は、さらに南下を続けて峠を越え、安全なモーラミヤイン方面まで退くことを余儀なくされた。第31師団が、下ビルマのパーブンに到着したのは、5月中旬以後、第33師団の到着は、5月下旬以後になった。その際、タウングーに向かう筈だった第18師団の第114連隊も、同じルートでパーブンに向かうことになった。少し遅れて、第53師団の第128連隊も、5月7日にカローを出発し、パーブンに向かった。

先行してタウングー付近に集まりつつあった第15師団は、集積されていた物資の一部を確保すると

共に、イギリス軍のカレンニ方面への侵入を食い止める役割を果たすことになった。その任務を、第56師団の隷下部隊に引き渡し、モーラミヤイン方面に向かったのは、6月下旬以後のことだった。

以上の撤退戦の間、第56師団は、2万人以上の人員を保ったまま南シャンの大部分を確保していた。5月中旬以後、カレンニ行政区の北端に位置するルインコーの防備を固めたが、南シャンの中心地であるカローやタウンジーをすぐに放棄することはせず、6月末までこれらの街を保った。その後も、カローやタウンジーの南方に防衛線を敷き、8月に至ったのだった。その間、タウンゲー東方の守備にも部隊を派遣し、第55師団の一部や貫徹兵団（独立混成第72旅団）の歩兵第187大隊を、6月中旬以後収容した。収容された部隊は、モチーを経由してパーブンに向かった。

以上の戦闘の間、下ビルマに位置し、戦前には余剰米を産み出していたタウンゲー地区でも、日本軍の米の集積は不十分だった。公刊戦史があげるビルマ方面軍情報参謀の河野公一少佐のメモによると、タウンゲーに集積された米を、1万人に対して定量の3分の2ずつ供給すると、6月末までしかもたない計算になっていたというのである⁷。同様に、カレンニ行政区の南側のパーブンも、下ビルマに属してはいたが、生産に対する徴発量が過大だったため、不足が起こったことが推測できる。ただし、今回の分析は、これら下ビルマにまでは及ぼさないことにする。

この河野メモでは、カレンニ行政区のケマピュー〜ルインコー地区について、給養人員を9000人（5月段階）ないし7000人（6月段階）として、定量を2分の1に減らしたとしても、「主食」が6月中旬まで、塩が8月中旬までしかもたない計算になっている。第15軍は、4月23日に、第31・33師団に対し、以後は糧秣、燃料の補給を実施しかねると打電したようだが、補給態勢は崩壊しつつあったのである。また、この計算からは除外されているが、2万人以上を擁する第56師団の食料を、南シャンの住民が引き受けていたことも忘れてはならない。

さらに、南シャンに約7000人集められていた入院患者の給養にも⁸、目を向ける必要がある。この患者の大部分は、ケマピューから東進してタイに向かったため、比較的順調に退いた。それでも、ビルマ領内では、南シャンとカレンニの住民が食料を負担していたのである。特に、カレンニの人口は6〜7万人程度だったのだから⁹、2万人の将兵と患者が通過すると共に、第56師団の半分程度（1万人）が居座った影響は、相当大きなものだったと考えられる。

ビルマ方面軍の兵站参謀だった後勝少佐は、4月22日〜23日に視察したところ、ケマピューの糧秣倉庫には精米が1トン足らずしかなく、ルインコーの糧秣は30トンしかなかったとしている（後、1996年、p.250, 251, 264など）。合計31トンの米は、定量を半分にすると、2000〜3000人の2ヶ月分という計算になる。この数字は、先の河野メモよりやや小さいものになるが、これ以外にも集積があったということだろうか。後参謀は、ルインコーの所長に周辺の集落からの買い付けを命じ、残り僅かな燃料を集めて、トラックでタウンジーやタウンゲーから運ぶことにしたとしている。後参謀によると、タウンジーには3000トンの弾薬・糧秣が集積されていたのだという（後、1996年、p.258）。先のイギリス軍の調査資料（5月中旬作成）では、南シャンでの徴発が詳細に書かれていたが、その糧秣が積み上げられていたのだろう。対して、タウンゲーの糧秣は、先の河野メモによれば、決して充分ではなかったようである。後参謀は、主にタウンジーの方をあてにしたと見るべきだろう。

第2節 撤退中の食料事情

次に、撤退中の食料事情に関する日本側の回想記を紹介する。時期順に、①1945年4月以前の様相を書いたもの、②撤退第1陣（1945年4月中旬〜5月頃）の様子を書いたもの、③その後の第56師団

や第15師団の様子を書いたものに分け、それぞれの中でも、ある程度時間順になるように並べた。同一人物の回想記を、複数回に分けてあげた部分もある。その際、住民の戦争被害、食料の焼亡の可能性にも留意するべく、集落の空襲被害が窺える記事もあげた。

① 1945年4月以前の南シヤンの状況

- ・第121兵站病院の軍医だった興野義一の回想記：1945年2月19日にタウンジーを出発して、本院を開設する予定のライカに向かった。ライカの南のパンロンで、イタリア人宣教師が経営するハンセン病の救護院のシスターに再会した。「土侯」が出奔したので食糧を得られず、日本軍も相手にしてくれず、このままでは患者と共に餓死するという話だった。この頃には空襲で、ロイレムは惨憺たる廃墟になっており、ナムランも無人の焼け跡になっていた（興野，1981年，pp.186-193）。
- ・日赤第486救護班の渡辺鈴子の回想記：1945年4月までカラーにいたが、食糧不足でキャベツなどの塩汁が多くなっていた（渡辺，1982年，p.38）。
- ・日赤第486救護班の杉原いほの回想記：カラーは毎日のように空襲を受け、燃えていた（杉原，1982年，p.73）。

② 撤退第1陣の様子

- ・第15軍補充隊の山西長軍医の回想記：1945年4月13日に患者を連れてインレー湖岸の病院から南下した。すぐ南の村で、住民がご飯やカボチャを持ってきて接待してくれた。その日、ピンラウンの市場が空襲で炎上しているのを見た。ケマピューからの山越えでゲリラと戦い、5月19日にパーブンに着いた（山西，1988年，pp.381-385）。
- ・第15軍補充隊の伏木清一等兵の回想記：インレー湖岸の病院から南下した。到着直前のケマピューが空襲で焼けているのを見た（伏木，1988年，p.397, 400）。
- ・第53師団第1野戦病院の沢井武三の回想記：1945年4月14日にカラーを出て、ケマピューに向かった。途中、食物の支給は全くなく、徴発も既に各隊がやっているのではほとんど何も手に入れられなかった。4月23日にケマピューに着き、4月28日～5月6日まで病院を開設した。5月12日にケマピューを出て山を越え、5月29日にパーブンに着いた（沢井，1975年，pp.253-254）。
- ・第53師団第1野戦病院の伊藤三好の回想記：タウンジーから南に向かったが、村人は逃げ去っており、糧秣として村の籾を奪った。時には米が切れた。1945年5月中旬にケマピューを出発した（伊藤，1975年，pp.240-241）。
- ・第53師団第1野戦病院の中嶋長五郎の回想記：1945年4月下旬にルインコーに着いた。糧秣の徴発に出かけたが、先の隊にとられていて何も得られなかった。4キロ以上足を伸ばして、やっと鶏1羽を得た。丁度その時ルインコーが爆撃され、街はほとんど破壊された（中嶋，1975年，p.264）。
- ・日赤第486救護班の渡辺鈴子の回想記：1945年4月18日頃に、カラーから撤退を開始した。ルインコーからケマピューの辺りは食料が極度に乏しく、夜に衛生兵たちと集落まで調達に行った。現地住民の食料庫のようところでトウモロコシを得た（渡辺，1982年，p.40）。
- ・日赤第486救護班の杉原いほの回想記：1945年4月18日にカラーから撤退を始めた。途中、患者の食料がなく、兵士1人と看護婦5～6人が組みになって探しに行った。私は倉にトウモロコシを見つけたが、中には米を見つけた人もいた。火事の直後の集落に行ったこともあった（杉原，1982年，pp.75-76）。

- ・日赤第 486 救護班の大石セツの回想記：ルインコーからは歩くことになった。食料を集めに行き、籾や乾燥トウモロコシをたくさん盗んだ。そのうちケマピューに着いた（大石，1982 年，pp.102-103）。
- ・野戦重砲兵第 5 連隊の浜田芳久の回想記：1945 年 4 月 18 日にカローの入院先から撤退を始め，5 月 8 日にケマピューに着いた。モチーから山道になり，行軍しながら籾を探したが，道筋の集落にはもう籾はなかった。脇道の集落から探し出して精米した。5 月 25 日にパーブンに着いた（浜田，1988 年，pp.229-230）。
- ・輜重兵第 15 連隊の足達敏夫少尉の回想記：ケマピューに着かないうちに，1945 年 4 月 20 日頃に隊の糧秣が尽きた。山頂付近に籾蔵を見つけ，老婆に軍票を押しつけ，部隊を誘導する伝令を走らせた。この時，心が痛んだ。翌日，全員で籾を搾り米を搗いた。4 月 29 日にケマピューに着いたが，糧秣の補給はなかった。そこからタウングーに向けて出発し，途中のモチーで少尉から米を貰ったが，翌朝には盗られていた（足達，1996 年，pp.217-221）。
- ・野戦高射砲第 51 大隊の中島喜三郎主計伍長の回想記：1945 年 4 月に，大隊主力はカロー付近から南下した。途中の集落で豚や鶏を徴発した。ケマピューの北方の集落では，食べ物「隅から隅まで探し尽くされ」ており，なんとかして僅かな米と雑穀・鶏・豚を得た。私も 5 合ほどの米を見つけたが，住民に泣きつかれて持っていけないかった。4 月 28 日にケマピューに着き，翌日僅かな糧秣を受領した（中島，1984 年，pp.216-224）。
- ・第 31 師団歩兵第 138 連隊の吉田秀市の回想記：1945 年 5 月上旬に，（ケマピュー付近で）サルウィン河を渡りタイに入る少し前に，集落で米を物々交換で手に入れようとした。しかし，通りがかった少将に，コレラの汚染地帯で何をしているかと怒鳴られた（吉田，1992 年，pp.206-207）。
- ・第 31 師団歩兵第 138 連隊の木村正照少尉の回想記：「我々は食糧が切れるとすぐビルマ人の家に入って籾等を押収し，それを鉄帽で搗いて食べた」。ただ，反対にやられることもあり，カローでは押し入った日本兵が住民に斬られて即死した。私も，カローで兵 2 人を連れて民家に押し入り，床下に隠してあった干魚を食べた。さらに，奥の部屋にいたビルマ人に干魚のありかに案内させようとした。翌日，ビルマ人の死体を見かけたが，日本兵に協力したからではなかったか。ある時には，狙撃されて全員死んだ例があるので，民家に入るなという通知がきた（木村，1980 年，pp.256-158）。
- ・第 31 師団歩兵第 138 連隊の豊島兵長の回想（談話）：モチーの手前で，1 人で集落に入り食料をねだろうとしたからか，戻ってみると戦友が斬られていた（木村，1980 年，pp.259-260）。
- ・第 31 師団工兵第 31 連隊の大江一郎の回想記：ルインコーでは空襲に遭ったため補給を受けられず，約 2 日南下してから 1 個分隊程で村をまわった。既に日本軍の徴発を受けた 2 つの村には 1 粒の米もなく，手分けしてもっと奥に向かった。そこで出会った友軍に，昨日も 1 人村人に殺された者がいると警告された。そこで，小銃を置いてから民家に入ったところ，住民は意外に親切で，白米をくれた。代償として手ぬぐい 2 本を置いていった（大江，1983 年，pp.153-158）。
- ・第 31 師団衛生隊の高阪正光の回想記：ケマピューで 11 日分の米と塩を受領して，峠に向かった。5 月 27 日にパーブンに着いたが，その間栄養失調で，自爆する音が聞こえない日はなかった（中野，1977 年，pp.201-202）。
- ・ビルマ方面軍後方第 3 課兵站部の田原権平の回想記：タウングーから 1945 年 4 月 27 日にケマピューに着いたが，一面の焼け野原だった。その後も爆撃や銃撃の連続だった（田原，1990 年，市ヶ谷出版）。
- ・第 33 師団歩兵第 213 連隊の井坂源嗣伍長の回想記：カローから 1 ヶ月分の糧秣を持って南下し，1945 年 4 月下旬にルインコーに着いた。モチーで再び多量の糧秣を受け取り，山越えをしようとした

が、途中で足りなくなった。山岳民族の家を歩きまわって、僅かな粉を手に入れ、種粉まで持ち去った（井坂，2008 年，p.357, 361, 366）。

- ・ビルマ方面軍兵站参謀の後勝少佐の回想記：ケマピューに物資を集積する差配をして、1945 年 5 月 7 日に自動車で同地を離れモーチーに着いた。その夜、パープンに向けて徒歩で行進を始めた。5 月半ば、峠の途中で第 18 師団の砲兵に追いついた。眼鏡で民家を探し、粉を手に入れてきたという話で、大きな麻袋に入った粉を見せてもらった（後，1996 年，pp.273-275）。
- ・第 53 師団第 2 野戦病院の村田実の回想記：カロの糧秣倉庫で食べ物を受け取り南下した。ルインコーの近くの糧秣集積所で、約 10 日分の粉を受け取った。ルインコーで 1945 年 5 月 9 日に空襲を受けたが、この時隊の一部は他の集落に副食物の買い出しに行っていた。同日夜の出発後間もなく、民家の中から干しトウガラシを持ち帰り、ジャガイモ畑を探して種芋を食べた。後戻りしたりしていたため、途中で米が不足し、野生のバナナなどを食べた。ケマピューに着いた時には、同行する 7 人とも食料がなくなっていた。ケマピュー付近で粉を受領した（村田実，1988 年，p.371, 373, 377, 378）。
- ・第 53 師団の名所茂兵長の回想記：1945 年 5 月 21 日頃に、ケマピューで米 5 升と古衣 1 枚を受領した（名所，1986 年，p.173）。

③その後の第 56 師団や第 15 師団の様子

- ・第 121 兵站病院の軍医興野義一の回想記：1945 年 5 月に、ライカよりの撤退第 1 梯団としてロイレムに向かった。バンインは集落が焼亡していた。ルインコーの北 8 マイルに病院の新設が予定されたが、作られていなかった。付近の部落では、夕方になると住民が山から下りてきて、納屋の粉を持ち出そうとした。これを兵士が差し押さえ、軍票を突き付け、米を 1 粒も渡さず追い払った。住民は、二度と来なくなった。しかし、日本兵も食料がなく、次々と死んでいった。もっと南のケマピューも、連日爆撃されていた（興野，1981 年，pp.207-216, p.231）。
- ・第 15 師団輜重兵第 15 連隊の足達敏夫少尉の回想記：1945 年 6 月下旬に、第 15 師団はモーラミヤインに行けという命令を受け、連隊主力は、タウングー東方から米を背負って出発した。ケマピューに着いた時には、米がつきかけていた。タケノコメシを食べたところ下痢になった。食料の欠乏で、アメーバ赤痢になる者も続出し、道端でうずくまる将兵の姿が増えていた。6 月 20 日頃にケマピューを出て、7 月 5 日にパープンに着いた（足達，1996 年，pp.228-236）。
- ・第 56 師団歩兵第 113 連隊の高崎立身の回想記：モーチーからタウングー東方に向かう路上で、死体を散見した。1945 年 6 月中旬にタウングー東方に配備を終えたが、主食のみ支給され、タケノコやキノコを集めて副食とした。栄養失調で病気が流行った（高崎，1983 年，pp.414-415）。
- ・第 56 師団歩兵第 113 連隊の河野勝の回想記：タウングー東方の守備を第 15 軍と交代した。途中の道路には、死んでいる者や蹲っている者が多くいた。1945 年 8 月初旬に、糧秣に困って集落に徴発に向かった（河野，1983 年，p.369）。
- ・第 56 師団歩兵第 113 連隊の日下部道雄の回想記：1945 年 6 月 25 日にタウングー東方で交代した第 15 師団は、無残であり憔悴しきっていた。8 月には、私の部隊も栄養失調と病気で消耗していた。徴発した粉を鉄帽で搗いた飯と岩塩の食事をとった（日下部，1983 年，p.417, 418, 421）。
- ・第 56 師団歩兵第 113 連隊の安田吉之助の回想記：タウングー東方で、食料の徴発に向かった者が地雷によって戦死した。周りの各所で、食料徴発に苦心するうち終戦になった（安田，1983 年，p.437）。

- ・第56師団歩兵第113連隊の道面勉の回想記：1945年8月には、モーチー西方にいた。徴発した籾により餓死を免れたが、副食は野草を入れた塩汁しかなかった（道面，1983年，p.466）。

以上の回想記により、南シャンやカレンニ行政区の様相が、ある程度具体的にイメージできる。撤退の初期には、住民が食料を提供してくれる例がないわけではなかった。それがすぐに、少ない食料をめぐる激しい攻防が繰り返られるようになったようである。このような軋轢の中、日本兵が、次第に栄養失調で消耗していった様相も窺える。南シャンにとどまった第56師団が、公刊戦史が描くような、最後まで精強だったというイメージとは程遠く、飢餓状態にあったこともわかる。そして、これらの日本軍の様子からの推定となるが、住民が置かれていた状況の深刻さも十二分に窺える。

ところで、これらの回想記からは、イギリス軍の爆撃で、沿道の集落が次々に焼き払われていたこともわかる。これまで、ビルマ住民の空襲被害に関する分析はほとんどなされてこなかった。だが、南方軍軍医部長だった青木九一中将の日誌のように、月あたりの死傷者数を記した史料も見つかっており¹⁰、今後深められるべきテーマである。その中で、南シャンについては、回想記から察するところでは、主な集落はほとんどが焼き払われたのではないだろうか。その際に食料が焼亡することもあっただろう。

まとめと展望

以上、戦争末期のシャン連合州の米穀事情につき、深刻さを物語る様々な史料があることを示してきた。これに続く、終戦直後のシャン連合州については、手元に米穀事情が書かれた史料がなく、1947年5月頃の月報まで飛んでしまう¹¹。それでも、1945年11月～12月のイギリス政庁の報告書では、メイッティーラなどの中央平原でも、米がなお不足がちで、輸入は不十分だとされている（1945年11月14日・12月4日のメイッティーラからの報告、12月8日・10日のビルマ政府報告による¹²）。中央平原は、雨期の影響を受けず、交通も比較的便利な地域だった。その地域がこのような状態だったのなら、10月までが雨期で、しかも「奥地」であるシャン連合州への供給は、より劣位にあったことが予想できる。今後、イギリス側の史料の発掘で、この点をより実証的に考察することが必要だろう。

また、本稿全体の課題である住民側の史料の発掘についても、今後全く期待が持てないわけではない。例えば、2002年に、ロックソック州の「土侯」の娘の回想記が、日本語訳されて刊行された。同書には、食料事情に関する記事は少ないが、それでも父の「土侯」が、1945年にイギリス軍の取り調べを受け、日本軍の食料提供の命令に応じたと語ったという件など、注目すべき部分もある（ネル・アダムズ，2002年，p.129）。もとより、「土侯」の家族の視点を、一般住民のものと一体のものとするべきではないが、同書のように、あまり知られてこなかった史資料が眠っている可能性は充分にある。同時代のものであれ、後日書かれた回想記であれ、その発掘に努めるべきだろう。

注

¹ 上ビルマの米の主産地であるシュエボウ地区は、収穫期（1944年12月～1945年2月頃）に戦場

となり、続いてメイティエラやマンダレーなど中部の不足地域が攻防の舞台になった。さらに 4 月頃から、下ビルマの全域が、敗走する日本軍と、それを追うイギリス軍やパサパラ（ビルマ国軍・東亜青年連盟・住民らの抗日組織）の戦いの場となった。米の収穫・精米・輸送は、極めて不円滑になったと考えられる。

² 1 人の 1 年間の消費を 170 キログラムとする計算法による。

³ （倉沢，1992 年）の第 1 部第 3 章や（古田，1997 年）を参照。

⁴ 古田氏は、北ベトナムの飢餓と、米の強制買い付けの因果関係を解明するには、集められた米がどうなったのか、さらなる分析が必要だとしている（古田，1997 年，pp.515-516 など）。一方、倉沢愛子氏は、ジャワでの籾の供出率がオランダ時代より低下したことを指摘しながらも、インタビュー結果を活用するなどして、同地で米不足が起こったとしている（倉沢，1992 年，pp.153-167 など）。氏の論稿にも、徴発（供出）された籾がどうなったのかなど、より説得的な説明が求められる。

⁵ これらの人口は、1931 年のセンサスによる。1941 年までに南シャンの戸数が 5.4 パーセント、カレンニの戸数が 17.1 パーセント増えたことから、戦時中の人口はもう少し多かったと考えられる。（日本ビルマ協会，1942 年，pp.36-37）を参照のこと。

⁶ 以下の展開は、特記のない限り、（防衛庁防衛研修所戦史室，1969 年）による。

⁷ （防衛庁防衛研修所戦史室，1969 年）の 330 頁による。筆者は、「緬甸方面軍作戦手簿」と題された河野少佐のメモを見たことがある（防衛省防衛研究所図書館蔵，資料番号は南西，ビルマ，19）。ただし、この番号の資料は、記事の日付けが前後しており、後日まとめ直されたものではないかと思われる。公刊戦史が引用したメモの資料番号と、作成時期は不明である。

⁸ 南シャンは冷涼で、イギリス時代からの保養地だった。その南シャンにつくられた兵站病院の入院患者数について、公刊戦史は後参謀の回想録を引用し、7000 人という数字をあげている（防衛庁防衛研修所戦史室，1969 年，pp.257-258）。第 53 師団第 2 野戦病院の部隊史も、方面軍の第 124 兵站病院の患者が 6000 人、それとは別に第 56 師団が独自に抱えていた患者が 1000 人だったとしている（伴，1988 年，p.143）。この他、ケマピューからタイまでの後送を担当した第 2 野戦輸送司令部の部隊史は、終戦後までに約 1 万人の患者を送ったとしている（二輪会，1970 年，p.343）。これは、退却開始後に発生した患者を合わせた数字だろう。

⁹ イギリスのフロンティアエリア委員会が作成した 1947 年の報告書では、7 万人と見積もられている（Burma Frontier Areas Committee of Enquiry, 1947, p.5）。

¹⁰ 「青木九一軍医中将日誌」（防衛省防衛研究所図書館蔵，南西，全般，104）の 1944 年 1 月 12 日の記事によると、1943 年 12 月のビルマ住民の空襲被害は、死者が 77 人、負傷者が 103 人、1944 年 2 月 13 日の記事によると、死者が 60 人、負傷者が 10 人ということである。

¹¹ （IOR M/4/2819）に収められたイギリス政庁の月報による。

¹² （IOR M/5/94）と（FO643-35/4E5）による。

引用文献一覧

1. 足達敏夫，1996 年，『挑戦』，産経新聞生活情報センター
2. Akio Takahashi, 2007, Regional Differences in Agriculture in Burma during the Japanese Occupation

- Period, Kei Nemoto(ed.), *Reconsidering the Japanese Military Occupation in Burma : 1942-1945*, Reserch Institute for Languages and Culture of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies : pp.157-178
3. 伴一郎, 1988 年, 『第五十三師団「安」行動の概要』, 昭和堂印刷
 4. 防衛庁防衛研修所戦史室, 1969 年, 『シッタタン・明号作戦』, 朝雲新聞社
 5. Burma Frontier Areas Committee of Enquiry, 1947, *Report of the Frontier Areas Committee of Enquiry, 1947*, Government Printing and Stationery, Rangoon
 6. 古田元夫, 1997 年, 倉沢愛子編『東南アジア史のなかの日本占領』, 早稲田大学出版部 : 504-524 頁
 7. 伏木清一, 1988 年, 「インレ湖健兵訓練所」, 第 53 師団第 2 野戦病院部隊史編纂委員会編『ビルマ北から南まで』, 昭和堂印刷所 : 389-402 頁
 8. 浜田芳久, 1988 年, 『死の靖国街道』, 現代企画室
 9. 井坂源嗣, 2008 年, 『弓師団インパール戦記』, 光人社
 10. 伊藤三好, 1975 年, 「思い出のまま」IV, 一親会『悪夢の四年』, 大平印刷 : 240-243 頁 木村正照, 1980 年, 『烈兵団かく戦えり』, 昭和堂印刷
 11. 河野勝, 1983 年, 「ビルマ作戦の思い出」, 興竜会編集委員会編『ビルマ従軍 ああ滇緬公路』, 青柳工業 : 363-370 頁
 12. 倉沢愛子, 1992 年, 『日本占領下のジャワ農村の変容』, 草思社
 13. 日下部道雄, 1983 年, 「終戦前夜」, 興竜会編集委員会編『ビルマ従軍 ああ滇緬公路』, 青柳工業 : 416-421 頁
 14. 興野義一, 1981 年, 『一軍医のみたビルマ敗退戦』, 旺史社
 15. 名所茂, 1986 年, 『戦場の一つ星』, 室町印刷
 16. 道面勉, 1983 年, 「ビルマ従軍記章」, 興竜会編集委員会編『ビルマ従軍 ああ滇緬公路』, 青柳工業 : 465-469 頁
 17. 村田実, 1988 年, 「中山隊の転進」, 第 53 師団第 2 野戦病院部隊史編纂委員会編『ビルマ北から南まで』, 昭和堂印刷 : 366-380 頁
 18. 中野信夫, 1977 年, 『靖国街道』, 京都社会労働問題研究所
 19. 中島喜三郎, 1984 年, 『ビルマ高射砲隊』, 叢文社
 20. 中嶋長五郎, 1975 年, 「ヤガンヂよりカローへ」, 一親会『悪夢の四年』, 大平印刷 : 263-264 頁
 21. ネル・アダムズ著, 森博行訳, 2002 年, 『消え去った世界』, 文芸社
 22. 日本ビルマ協会, 1942 年, 『ビルマ統計書』, 国際日本協会
 23. 二輪会, 1970 年, 『わだちの跡』, 秀和印刷
 24. 大江一郎, 1983 年, 『兵は死ね』, 鵬和出版
 25. 大石セツ, 1982 年, 「我が思い出の記」, 宮部一三編『白衣の天使』, 叢文社 : 92-106 頁
 26. 沢井武三, 1975 年, 「ヤガンヂよりミヨンガレーまで」, 一親会『悪夢の四年』, 大平印刷 : 248-262 頁
 27. 杉原いほ, 1982 年, 「ビルマ従軍の思い出」, 宮部一三編『白衣の天使』, 叢文社 : 62-88 頁
 28. 田原権平, 1990 年, 『ビルマ・シャム放浪記』, 市ヶ谷出版
 29. 高碓立身, 1983 年, 「終戦直前痛恨の思い出」, 興竜会編集委員会編『ビルマ従軍 ああ滇緬公路』, 青柳工業 : 414-416 頁
 30. 武島良成, 2003 年, 『日本占領とビルマの民族運動』, 龍溪書舎
 31. 武島良成, 2004 年, 「カボウ谷地の米不足とインパール作戦」, 『桃山歴史・地理』39, 桃山史学会

:4-18 頁

32. 後勝, 1996 年, 『ビルマ戦記』(新装版), 光人社
33. 渡辺鈴子, 1982 年, 「戦火の中の青春」, 宮部一三編『白衣の天使』, 叢文社: 27-46 頁
34. 山西長, 1988 年, 「転進」, 第 53 師団第 2 野戦病院部隊史編纂委員会編『ビルマ北から南まで』, 昭和堂印刷: 380-388 頁
35. 安田吉之助, 1983 年, 「モーチ街道の思い出」, 興竜会編集委員会編『ビルマ従軍 ああ滇緬公路』, 青柳工業: 436-438 頁
36. 吉田秀一, 1992 年, 「カラーより転進」, 油井利雄『慟哭 初年兵のビルマ戦線』, 烈一三八石川ビルマ会: 198-211 頁

防衛省防衛研究所図書館所蔵史料

1. 「青木九一軍医中将日誌」(南西, 全般, 104)
2. 「緬甸方面軍作戦手簿」(南西, ビルマ, 19)

イギリス旧インド省図書館所蔵史料

1. IOR M/4/2540 (Weekly Intelligence Summary)
2. IOR M/4/2819 (Frontier Areas : Shan States ; General)
3. IOR M/5/85 (Burma Economic Notes Produced by Burma Intelligence Liaison Office and Civil Affairs Staff (Burma))
4. IOR M/5/94 (Sir J.Wise's Report on Conditions in Meiktila and Mandalay)

イギリス国立公文書館所蔵史料

1. FO643-35/4E5 (Situation Reports)
2. WO203-893 ((Administration) North Burma : Re-Organisation)
3. WO208-163 (Burma during the Japanese Occupation (Burma))
4. WO220-142 (Burma during the Japanese Occupation)